

日本の早期都市に関する一考察

—比較文明史の視点から—

許

宏

日本における都市起源とその初步的發展を検討するためには、まず最初に人類文化史の枠組と関連概念を明らかにしなければならぬと思う。

一 都市革命・都市・文明

「都市革命」という概念を最も早く提唱していたのは、チャイルド氏 (V. G. Child) である、氏は「都市革命」で「文明」の出現を示唆している。⁽¹⁾その後、伊藤俊太郎氏は、人類文化史上の時代区分の標識となるべき五つの大きな転回点があったとしている。即ち、「人類革命」、「農業革命」、「都市革命」、「精神革命」、「科学革命」である。⁽²⁾そのうち、小論で触れる前三者に言及すれば、道具の製作に始まる「人類革命」では既に文化が誕生しており、いっそう複雑な技術によって自然を加工する「農業革命」は、より高い意味での文化の形成を指すものである。「都市革命」時期になると、メソポタミア、エジプト、インド、中国、メソアメリカ、アンデスなどを基本文明とする初期都市文明が成立し、初めて国家が誕生し、それが各地に伝わり、こうした周辺文明を含んだ文明が進歩していったのである。

とすれば、文明、国家、都市という三つの概念は、緊密な関係を持っており、換言すると、同一の歴史現象に関する異なっ

た角度からの解釈であると言えよう。

まず、中国語と日本語での「文明」とは、英語 Civilization の訳語であり、その語源はラテン語の Civilisatio で、「都市化」を意味する。ラテン語の「国家」(Civitas) も同じ語源から派生したものである。したがって、「文明」は歴史の発展した一つの進んだ段階で、階級の分化や国家の成立などを伴う「都市革命」以降の人類文化のあり方ということになるであろう。即ち、国家は文明時代の特有な社会組織であり、都市は文明時代の特有な、国家にこそ相応する集落形態であると考えうるのである。

従来、都市をどのように規定するかは極めて難しい問題であり、都市起源について一義的に定義することはさらに容易でない。上述したように、早期都市は「都市革命」を通じて、原始農耕社会の中から誕生してきたより高級な集落形態である。原始村落に比べて、その特徴は次のように言ってよいだろう。

1. 人口の相対的集中
2. 住民身分の複雑化（階層分化と産業の分業化）
3. 政治的、経済的ないし文化的中心地の形成

二 「都市なき文明」説の検討

先述した原初六大基本文明に対して、エジプト文明を「都市なき文明」とする研究者がいれば、マヤ文明における都市の存在を問題視する研究者もいる。問題の焦点は城壁の欠如と集落形態の分散性にあるようである。この二つの点について、一歩進めて分析することができよう。

(一) 都市と防御性構築物

古代文明の発祥地において、防御性構築物の築造は一般的な現象であることは言うまでもない。しかし、城壁ではなく、上述した農耕村落と異なった集落の内容こそが都市成立の必要的指標であると考えられる。「城」とは、人によって住居、軍事、政治的目的を持って選ばれた一区画の土地と、そこに設けられた防御的構築物をいうのである。⁽³⁾ ある目的を持って選ばれた一区画の土地として、「城」は現在でも「都市」と通じて使われ、中国語では都市に「城市」の呼称を用いる。しかし、都市の成立は必ずしも防御性構築物を有しなかったのである。防御性構築物が存在するかどうかは、全く必要性によるものであり、当時の政治・軍事面の情勢、国力及び地形や地勢などの要素によって決定づけられたのである。必要のない場合には、その欠如は全く理解され、疑問あるいは例外とすべきではないだろう。

第一次原初都市文明のうち、メソポタミア文明及びその影響を受け入れたインド文明では比較的典型的な城壁都市が出現した。メソポタミアにおいては城壁の存在は都市の必要不可欠な条件の一つであったが、エジプトでは、城壁の存在が顕著ではなかった。中国やメソアメリカの早期都市は城壁のあるものもあれば、ないものもあった。中国では、本格的な城郭制度は春秋時期になってからようやく確立したことが分かる。

早期都市で築かれた城壁は主として防御の役割を果たしていたと考えられる。例えば、メソポタミアは平地で何ら越えがたい自然の障害を持っておらず、たえず周辺の遊牧民の侵入を被っており、常に戦争の危険にさらされたため、防御性城壁が必要に応じて現れてきたのである。⁽⁴⁾ これに対して、エジプトにおいてはナイル川の両側が砂漠によって外界から隔てられ、外敵の侵入が極めて困難であったので、その内部に強力な王権のもとに統一が行われ、城壁は必要ではなかったはずである。メソアメリカ都市テオティワカンにおいても、防御施設が設けられておらず、おそらく周囲を高い山々に囲まれた天然の要塞に立地していたことによるものと思われる。⁽⁵⁾ 中国の銅石併用時代にあたる龍山時代に、城址が多量に出現することは戦闘に備える緊張状態が存続していたからであろう。続く夏商西周時期における都城のうち、城壁の認められなかったものがいくつか存在

しており、今後城壁を発見する可能性を排除できないが、最盛期の強力を誇っていたため、その当時は特に防御性施設は必要なかったと推測できよう。

日本の場合には、たとえ中国の都城を模倣した都城（七世紀の藤原京が中国の制度に習った日本最古の都市とされている）が出現したとしても、その骨格ともいふべき城郭は受容せず、城壁都市を生み出さなかったのである。都城それ自体の防御機能が高くなかったことは、日本が四周を海で囲まれ、外敵の脅威にさらされることがなく、特殊な地理的、民族的条件によるもの⁽⁶⁾と言つてよい。

(二) 分散と集中

都市形成の重要な指標の一つは、その集住性であることは言うまでもないが、その一方で、この点だけでは都市と農村を明確に区分できないと考えられる。初期都市は農耕村落の集落形態の中から生み出され、こうした変化は一種の量的変化の中の質的変化と言える。したがって、初期都市と農村との間の差異は、非常に高い相対性のものであると言えよう。

都市と呼ぶに足る定住地は、多種多様な様式で存在している。砂漠を「天然城壁」とする古代エジプト都市は城壁がなく、各種の遺存がナイル川に沿って配置されている。そのうち、ピラミッドや葬祭殿は都市の中心部にはなく、かえって都市の外につくられた。また、都市の外れには手工業者の工房や王の直属の工場などがあった。そのほか、地理的条件の良い所には王や妃の私的住居、即ち王宮が造営されており、季節などにより住み分けていたと考えられる。これらのことは強い分散性を示している。⁽⁷⁾

マヤ文明の場合には、その都市分布は特定の箇所に集中せず、各地に分散しており、またその基本構造は周辺の農村集落の居住形態を原型として自然に成長、発展したように見受けられる。特に、他に抜きん出た大規模な都市が存在していない点は、マヤもギリシアのポリスに似て都市の人口規模とそれを取りまく農地の食料生産能力の間に、一定の社会生態学的均衡を維持

する必要があったからであると考えられる。また、それ以外のいくつかの条件に制約されたため、マヤ都市文明は成熟した形においてさえも、結局は局地的に分立し、従属都市や農村との相互依存による地方分権的、多極分散型の状態⁽⁸⁾で終わっている。

したがって、都市形態の分散と集中については、巨視的に理解して把握すべきであろう。都市の集中というのは相対的集中であると思われる。ある集落が「都市化」するかどうかに対して、人口の集中は絶対的基準ではなく、その内在的要素の分析こそが問題のかぎであろう。即ち、その住民身分の複雑化（階層分化と産業の分業化）及び政治、経済ないし文化的中心地の形成の有無が決定的な尺度であると結論づけてよい。

要するに、「都市化」を真髄とする文明社会には都市がなく、斬新な社会組織としての国家が農耕村落の基礎の上に存在したことは考えられないであろう。私見によれば、少なくとも第一次「都市革命」を経験した基本文明と、それと同様に穀物農耕と定住生活を基盤とする周辺文明の中に、都市なき文明がある訳ではない。

欧米の研究者の研究成果が示すように、基本都市文明の形成に寄与したのは、穀物農耕に基礎に置いた定住集落よりほかになく、根茎類栽培及び採集、漁撈、狩猟、遊牧を生業とする人類社会から、文明は独立発生できなかったのである。それらの人間集団の一部がその後次第に文明段階に入り、そこで国家が出現したことはすべて都市文明社会の文明要素の刺激、伝播の結果である。これらの穀物農耕や定住生活という伝統のない集団は、文明の影響を受ける上で受動性と断片性を有しており、文明要素を十分に吸収し消化しうる能力がなく、かつその必要もなかったといえる。このような状況のもとに、都市を含む諸文明要素の不完備、いわゆる「都市なき文明」の存在は当然のことであろう。

三 日本の早期都市に関する認識

世界範囲における都市文明の発生と発展の過程中、いくつかの地域を要として、若干の恒常的交流を可能にした文明交流圏

が次第に形成されていた。また、ある文明交流圏の中には、常に基本文明と周辺文明が存在していたのである。⁽⁹⁾ 古代中国と日本はこのような文明交流圏の一つとしての「東アジア文明交流圏」の枠組に位置している。

総括的にみれば、日本においては少なくとも縄文時代晩期から、朝鮮半島を含む大陸の文明作用を受け、すでに初期農耕が始まっていた。やがて大陸の文明要素の導入を契機とする弥生時代の開幕と水稲耕作による富の形成及び社会の計画化が、身分、階級、政治組織の発展を促すことになったのである。弥生中後期になると、倭人社会は急速に文明段階へ突入し、古墳時代には文明を初歩的に発展させていったと考えられる。とすれば、日本文明が中国文明の周辺文明として出発し、初歩発展したといってよいだろう。

(一) 弥生時代都市発生論

1. 囲郭集落の成立とその変容

囲郭集落の出現は、世界範囲で農耕の成立以降に認められる共通の現象とすることができ、弥生時代を特徴づける集落形態もこうした「囲郭集落」である。一般に、弥生時代の囲郭集落は、稲作農耕の登場において大きな役割を果たした渡来民族が、その故地における集落の造成技術を伝えたものであったと考えうる。弥生時代の成立期において、渡来集団と在来集団との領域をめぐる争いは当然予想されるが、そのことがまた囲郭集落を造営させる契機になったと思われる。さらに、急速な農耕の拡大とそれに伴う人口増加を基礎に、耕地と水利をめぐる利害の衝突、あるいは生産用具に不可欠な石器や鉄器の原材料の確保や供給ルートをめぐる争いなどが生じ、弥生時代のほぼ全期間にわたって戦闘に備える緊張状態が存続したため、囲郭集落はその必然の産物である。⁽¹⁰⁾

考古及び文献資料が示すように、弥生中後期の紀元前後以降、大型の方形周溝墓と埴丘墓、中心的祭器としての銅鏡、銅剣(矛)、銅鐸、生産用具と武器の鉄器化、さらには『後漢書・地理志』及び『三国志・倭人伝』に記載された「百余国」、

「三〇カ国」、そして「耶馬台国」などが次々と登場してきたのである。このことから、弥生時代中後期には、農耕共同体を超えた身分、階級が次第に明確になり、それらを共通の秩序で統一する必要が高まり、強大な共同体による広い地域の統合が進められ、既に国家の萌芽ないし端緒があったことに大きな示唆を与える。

囲郭集落の数は、この時期になると爆発的に増加し、防御的機能を高めた高地性囲郭集落が盛行し、さらに吉野ヶ里遺跡や唐古・鍵遺跡のような二〇万平方メートルを超える巨大な囲郭集落も出現した。⁽¹²⁾ これらを指標として囲郭集落が著しく変容したことが推定できる。

2. 都市的機能を備える大型囲郭集落の登場

先述したことを背景として出現する囲郭集落の大規模性とその内容の複雑性の意味は、改めて考察する必要があると思われる。

まず、吉野ヶ里遺跡を例として考えてみたい。この遺跡では、弥生中後期に延長約二・五キロメートルもの外濠が掘削され、四〇万平方メートルに及ぶ大規模な囲郭集落が形成されていた。その中には、また二重濠を周囲に巡らせた二つの小区画を設け、この二つの小区画とその周辺に竪穴住居と高床建物など一〇〇棟以上が各所にまとまって配されている。さらに、内濠の内側には物見やぐらのような高い建築物が確認される。これは即ち中枢区を特別に区画していることを示している。また、外濠の北端には全長四〇メートルを超える大型墳丘墓があり、その前面からは立柱跡と祭祀土器が大量に出土している。外濠の西外側には、後期の大型高床倉庫とみられる掘立柱建物群が配置されている。⁽¹³⁾

こうした巨大集落は、その集住性の極めて高い点が非常に注目される。その上、濠で画する首長層の特定居住区の存在、大型墳丘墓や分列埋葬が示す身分と社会的地位差の本格化、墳丘墓前の立柱と祭器埋納が示す大規模な祭事の展開、青銅器鑄型とその工房跡などにみられる専門工匠の出現と分業体制の成立、大倉庫群の設置からみた物資の集中蓄積と管理などが明らかになっている。

さらに、吉野ヶ里遺跡や唐古・鍵遺跡は共に弥生時代中後期において北九州と畿内地区の最大の集落であり、いずれの周辺にも近接して独立した衛星的な小集落が存在しており、それらと一体となった一定地域における中心的集落に違いない。

また弥生時代には、西日本の諸集団間に石器、塩、青銅器及び後期の鉄器などの交易流通網が存在したことが指摘されている。⁽¹⁴⁾『三国志・倭人伝』に「国々市あり。有無を交易し、大倭をしてこれを監せしむ」とある記述は、この交易流通網を統括し、また原料を獲得するため海外との交易権を掌握する機構が存在したことを示すのである。このような交易の動脈といえるルートと中継点を掌握していたのは、唐古・鍵や吉野ヶ里など域内外の交通の要衝にあった巨大な集落で、物資流通を統轄する交易センターの働きをしていたと考えてよいであろう。

要するに、このような巨大な囲郭集落は地域的な政治的統一社会（クニ）が成立した段階の地域の政治・宗教・経済的中心地となり、都市的機能を備える集住集落であり、言い換えれば日本における最古の都市といえよう。

(二) 古墳時代都市存在論

もしも日本学界に弥生時代の大規模な囲郭集落を初期都市として認めている研究者がいるとすれば、古墳時代に都市があったという問題に対し、みなは例外なく否定的な回答を与えるであろう。一方、古墳時代には既に国家が形成され、文明段階に達したという見解は一般的である。その考えによれば、日本には都市なき文明があるはずである。

日本の場合には、縄文時代にわたった定住生活とその後期の畑作に続く水稲耕作の開始、その文化の成熟と飽和状態などは弥生時代の展開にとって不可欠な前提条件なので、弥生時代の社会と文化は縄文時代のその到達点を母体として生成したものであると考えられる。即ち、弥生から大和王権形成にかけての時代における社会的要因と中国文明の摂取はほぼ同等の重みで作用し合っていると言つてよい。とすれば、この時期に発生した文明は、文明要素を消化する能力を有しており、中国文明はその誕生を促し、その発展速度を早める作用を与えたものと考えられる。したがって、日本のような周辺文明はその発生と

発展の過程中、比較的多くの基本文明との共通性が現れ、非定住性穀物農耕社会の周辺文明との顕著な差異があるはずである。ゆえに、基本文明と同様に古墳時代の文明は「都市なき文明」ではないと思われる。

確かに、古墳時代における集落形態の分散性と防御施設の手薄さは非常に注目されている。しかし、詳細に分析すれば、この時代にも都市が存在していたと考えられるのである。

1. 豪族居館と集落形態の特質

先述したように、弥生時代中後期の大型囲郭集落では、中枢区と周辺区を区別し、中枢区を特別に区画する場合があることを示している。つまり、弥生時代の首長は集落成員とともに一つの拠点集落の中に居住したが、一定の区域を濠や柵列で区画し、占有する場合があったということである。そして、このような大規模な囲郭集落は、弥生時代終末期にほぼ解体しており、首長層は囲郭集落から分離して別の場所に自らの居館を濠や土塁や柵列で囲い、防御を固めることによって外敵に備えただけでなく、一般民衆との隔絶をも進行させたのである。あたかも一般成員と同じ共同墓地の一面に墓を営んだ首長が、弥生時代の後期後半には集落を見下ろす丘陵墳の上に大規模な墳丘墓を営み始めたことと背景を同じくする現象というべきである。⁽¹⁵⁾

居館と集落形態の特質を概括すると次の通りである。

(1) 区画が比較的整然とし、小規模になり（各辺長数十から百余メートルほど）、方形周濠、石垣、土塁、柵列は指標として最もよく認識されている。それは、居館が集落成員から隔絶され、閉鎖的な空間を形成し、かつ対外的な防御機能を持つものであることを示している。

(2) 掘立柱建物の存在、中核を占める大型建物、倉庫群を伴うという特徴によって一般的な集落とは識別しうる。居館内の祭祀、政治と経済の区画分離が推定されている。例えば、静岡県古新田遺跡では東西約二〇〇メートルの範囲に多くの掘立柱建物、高倉群があり、まとまった二つの群が存在している。そのうち、前庭を政治空間として使用し、後庭を祭祀と経済の空間として使用したとされている。この意味で、首長居館は居住空間であるとともに政治空間でもあったのである。

(3) 首長層の居館中における竪穴住居は居住者の間に格差が存在したことを示唆している。例えば、五世紀後半の群馬県三ツ寺遺跡において平地式住居の中心建物のある一角とは柵列を隔てて、別の区画の中にこのような竪穴住居があるが、これはこの居館における工房或いは奴婢などの従属的な人々の住居と考えられる。

(4) 豪族居館と手工業との密接な関係が認められる。現在までに、古墳時代の集落跡と居館跡のほか、様々な生産址が多く発見された。須恵器生産や鉄鍛冶は一定水準の技術の熟練度が要求されるため、それらの手工業が専門工人によって担われたのも容易に想定できる。そして、手工業の専門化、細分化により各集落において生産された多様な手工業製品を流通させることは不可欠である。古墳時代における塩や須恵器のように、地域ごとの生産と流通網が既に存在していたことは指摘されている。「商人層」の存在が考えにくい古代社会において、首長が各集落の製品を集積し、それを他首長との交易に用いたり、配下の集団に分配したりする役割を担ったと思われる。それに、鉄製武器など王権の維持にとって重要なものや鏡や装身具のような奢侈品、あるいは独占したり、継承の必要な高度な技術を用いるものなどは、王権直属もしくは首長に付属した「官営工房」で生産されたことが想定される。⁽¹⁶⁾

(5) 居館周辺における集落の計画的配置が存在することは定説化しつつある。居館の周辺には、竪穴住居を主体とする集落がいくつか点在し、工房村という分業を示唆する遺跡などもあったので、計画的集落を想定できる。古墳時代前期に属する静岡県大平遺跡のように、首長居館が集落成員の屋敷群とさほど距離を置かずに建てられている状況は、弥生圏郭集落内の首長住宅が集落外に出るとともに、集落内の成員も特定単位ごとに屋敷を構えながらも集住しているように見える。その上、一般成員の集落においても屋敷地的な小区画が顕著となったのである。これらの集落群は経済的、社会的単位になり得たと思われる。

(6) 数多くの例からみると、居館と古墳には規模や様式などの面で相当深い関連性のあることが認められる。これらの居館は祭祀、軍事、政治権力を握り、古墳の被葬者であり、またそれを造営する在地首長層の本拠施設であることは明らかになっ

ている。古墳時代の全期間にわたる約三百年のうち、日本全国で造営された前方後円墳は四〇〇〇基に達し、そのほか円墳や方墳の数は一〇万基を超えると推定されている。古墳造営の労働力は推測できないほど膨大なものであり、その造営に投下されたエネルギーの大きさとそれを動員しえた権力の成熟度を如実に示している。⁽¹⁷⁾

(7) 前方後円墳の造営のほか、居館を中心として大規模な土木事業が行われたことは判明している。耕地開発とそれに伴う巨大な灌漑水路の掘削工事や大型倉庫群の設置などの開拓事業が、居館を拠点とした首長の主導のもとに実施されたことを示している。

先述した居館、古墳、庶民集落群、手工業工房、水路、耕地などがセットになったこのような景観は、古墳時代の各地で一般に展開していたと思われる。

2. 古墳時代の都市形態の分析

古墳時代における集落形態は強い分散性を呈しており、中国都市のような多機能集中型という形態はまだ認められない。しかし、いわゆる古墳時代の農村において、大和政権の大王と在地首長層の居館が散在し、周辺にはその威勢を誇るモニュメントとしての巨大な古墳が分布し、そこで盛大な葬祭儀礼が行われた。これらの政治中心である居館は防御機能を持っており、その内部には祭、政、経の区画が存在し、かつ整然と計画されていた。それを中心として周囲に各種の手工業工房址が分布し、一般の集落も区画され、耕地開発や巨大水路と倉庫群の造営が行われたことは既に明らかにしている。古墳時代の日本社会は、まさにこのような居館と古墳の主である首長層に統率された集落群からなっており、集落群ごとを都市域とするものであろうと考えられる。

古墳時代を特徴づけるこのような都市のあり方は、むしろ地域の隅々まで小規模な都市が存在し、都市のネットワークが農村に浸透していたところにある。支配者集団は土地所有と経営をしており、都市と農村との区別を曖昧にするのである。生産能力の制限、階級関係と導入された文明要素を消化する面での未熟性、東アジア的な都市と農村の機能分離の不徹底性など

は、この種の集落形態が存在した諸原因によるところであろう。しかし、全体的にみるならば、首長層の居館を中心としたこれらの集落群が既に当地域の政治、経済、文化の中心地となる機能を果たしており、その住民身分が複雑化し、階層分化と産業の分業化が著しく現出していたのである。したがって、これは原始村落と本質的に区別され、都市の範疇に属すべきであると同時に、「都市革命」の不徹底性のため、一種の未熟な都市形態を呈していたと考えられる。

中国と同様に、東アジアに位置する日本の早期都市も王権都市に属し、政治的中心地としての機能をもっていた。日本の古代都市は、まず「みやこ」を中心に展開した。ミヤコとは元来大王の居所を示す「宮」に場所を表す「こ（処）」が加わって出来た言葉である。⁽¹⁸⁾ 中国の都城を見本とする都城（支配者の居住区と政治施設を持つ「宮」と役人や都市住民を集住させる「京」の二部分からなる）は七世紀に出現したが、これは日本の最古の都市である訳ではないと思われる。即ち、王権都市の最も重要な構成要素としての宮（居館）は、日本の初期国家の誕生とともに既に出現していたが、完全な都城の成立する以前に、その京の部分は一種の比較的分散的形式で構成されただけである。古墳時代の分散的都市形態は七世紀以降の都城と比べ、それらの内容も性質も本質的な区別はないのである。両者の間の差異は、後者が導入された計画的区画を有するものすぎないと考えられる。

四 中日早期都市の比較について

(一) 都市成立の歴史的背景の比較

弥生時代の耶馬台国が登場する過程は、身分と階級の形成の上に国家の端緒が現れる歴史であったし、古墳時代の開幕と大和王権の成立は階級関係の拡大の上に国家が本格的に整備されてくる歴史であった。このような身分、階級、国家の形成や原始から文明への発展は、中国と同じように世界の各地で生じた人類の歴史の歩みの一つである。

農耕開始以降、それを基礎とした定住と人口増加を背景として、耕地や水利などの領有権をめぐる集団間の戦闘が激しくなり、これに伴って防御施設を備える現象が世界各地で認められる。中国の新石器時代に属する興隆窪、半坡、姜寨などの環壕集落も、日本の弥生時代前期の囲郭集落もこのような歴史的産物と考えられる。続く中国の龍山時代と日本の弥生時代中晩期はいずれも戦争の時代と呼ばれ、文献記載の「五帝伝承」及び「倭人争乱」の時代に相当する⁽¹⁹⁾。農業の発達、富の蓄積は貧富の拡大、階層分化及び集団間の分化をさらに本格化し、集団間の激しい戦争による緊張状態が継続していた。その結果、共同体を共通の秩序で統一する必要性が高まり、強大な共同体による広い地域の統合がいくつもの段階を経て進められ、国が形成されていったのである。龍山時代の城跡と弥生中後期的大型囲郭集落の出現から、このような強制力を持った権力機構の成立が確認できる。したがって、龍山時代も弥生時代中後期も原始農耕社会から文明社会へ転換した重要な時期であり、国家と都市文明の誕生期でもある。最古の都市は部族連合の国々の政治的中枢と流通経済の拠点として初めて登場した。

一方、都市出現とその初步発展の基盤からみると、両者はいくつかの相違点があったのである。

先述したように、中国の龍山時代における早期都市文明は基本文明として登場するものであるが、これは数千年にわたる農耕文化の発達の土台の上にほぼ独自に発展してきた。かつ都市文明の基礎としての農業は粟作と稲作の二つの大きな系統に分けられ、ほぼ全期間に農具は石器を主としており、鋤耕段階にあたっていたのである。メソポタミアやエジプトなどの文明発祥地で見られる大規模な灌漑はまだ出現していなかった。

中国文明の周辺文明である日本の場合には、縄文文化の発達に基づいて、弥生時代に始まる初期農耕の最初段階から大陸の先進的な稲作農耕技術を導入し、灌漑技術と水田管理を会得し、中後期の金属器の製作と使用により、さらに生産性が高まったのである。この発達した技術は、中国における数千年間にわたる農耕発展の到達点を基礎にしている。それに当時の渡来集団は、進んだ農耕技術や囲郭集落の造成技術だけではなく、その故地でかなり以前に発生した国家観も伝えてきたと考えられる⁽²⁰⁾。このような多方面の刺激伝播によって、日本は数百年の比較的短い間に一歩先んじて原始社会から文明段階へ突入し、初

期都市と国家が誕生してきた。その後、漢帝国の政治支配の動揺を契機とした二、三世紀の東アジアにおける高度な政治的緊張は、古墳時代の広域王権国家の政治権力の形成を促進した国際的要因であろう。この種の歴史発展上の加速性と基本文明の波動を反復する状態は、周辺文明の二つの特質であると考えられる。

同時に、周辺文明である日本社会の原始から文明への移行は、中国が実現したような社会底辺を包む形では展開せず、政治権力を握る支配者からしか始まらず、底辺を包む全社会の文明化は、中世までの長い歴史の中で次第に達成されたものであった。そして、その長い文明のプロセスは、弥生時代、古墳時代における支配者の文明独占を出発点としており、社会底辺の原始性の強固な存続を特徴としている。このような文明発展の特性は、その独特な都市形態の形成にとって決定的意義を有しているといつてよいだろう。

(二) 都市起源と発展スタイルの比較

先に述べたように、中日における早期都市はいずれも原始社会晩期の緊迫した戦争状態の中から誕生し、かつ大型の中心集落を前身として登場してきたものと思われる。そして、その内部の階層差と非農業人口の存在は明らかになっている。現在までに、龍山時代の城跡の中でその後に見られるような明確な城郭（宮と京との）区分はまだ認められなかった。弥生時代の大規模集落も、首長が一般成員とともに同一の集落内に居住したのである。このことから、両者のいずれにも首長層と一般成員との隔絶性はまだ顕著ではなく、階層分化が十分ではなかったことが分かる。これは国家と都市発生の初期段階に特有な現象と言えよう。

龍山時代を継いだ商周時代になると、周辺諸集団を吸収、統合する形で成立した広域王権国家が出現しながら、次第に東アジア的特色をもつ都城制が形成していた。王室の宮殿宗廟区を中心として、異なった階層と分業に属する人々が同じ場所に集住したことにより、大規模な都市になっていた。このようなスタイルは多機能集中型の都市形態と呼ばれることができる。

弥生時代終末期には、首長層が囲郭集落から分離して、自ら居館を構えており、拠点集落からの分村化が激しく生じていたのである。分村は拠点集落よりも劣勢な地位にあったようであるが、それは大規模な囲郭集落を必要とした地域間の政治的緊張関係に変化が起きたものと考えられる。即ち、前方後円墳の成立に象徴されるように、畿内の王権の指導性のもとで各地の首長間に一定の政治秩序が成立し、集落形態は当時の政治的形勢と戦争の性質の変化などと密接な関係を有していると思われる⁽²¹⁾。このような分散的集落形態はほぼ古墳時代の全期間にわたって存続していた。七世紀までの長い間に支配者の居住区と政治施設を持つ「都宮」の周囲には貴族、役人及び市民の集住する「京」の部分が形成しなかったことが分かる。

現在のところ、畿内最高支配者の政治拠点（都宮）の実態はまだ明瞭ではないが、奈良県纏向遺跡⁽²²⁾のような突出した規模の遺跡及び和歌山県鳴滝遺跡、大阪府法円坂遺跡で発見された大型倉庫群⁽²³⁾などは予想以上に巨大な規模と荘厳性に富むものであり、非常に注目されている。このことからすると、大王の都は大規模であり、かつ大王の居住地とともに公的機関を小地域に集中した都宮がある可能性は高い。これに对照をなすことは、その後の都城の構成要素である「京」の部分がこの時期に極めて分散的、未発達な状態で存在したことである。また、都宮居館と社会底辺の間には顕著な差が現れていた。これは日本の特色をもつ都市構成のあり方になっており、前述した文明の未熟性に規定されたものと考えられる。

(三) 草創期都市の囲郭施設と配置構造の比較

囲郭施設について各文明発祥地の早期都市で見られるものは様々な様式を呈している。メソポタミア、インドでは日干し煉瓦で城壁が築かれ、メソアメリカでは石壁が見られるが、中国の場合には独特な版築で築城し、同時にその外側はまた濠で囲まれている。弥生時代における集落の囲郭施設に言及すれば、集落の周りに主として環濠をめぐらせ、濠以外に土塁や柵列をも設けたのである。土塁は一般に環濠に付随しており、濠掘削時排出の盛土とみることができるので、防御面で版築城壁より劣っていることは言うまでもない⁽²⁴⁾。しかし、当時の弥生人にとって、これは有効な防御手段であり、当時の政治情勢、政治集

団の発達程度、地理的条件、戦争の性質と規模及び戦法などの要素に決定づけられるものと考えられる。

囲郭集落の規模からみると、吉野ヶ里遺跡、唐古・鍵遺跡のような大型集落は龍山時代の城子崖遺跡などの城跡と匹敵し、或いは上回っているが、周濠の掘削と城壁の築造を比べると、労働量に対する需要程度が異なり、技術面でもやはり後者の方が高まっているのである。その異質的な工事の展開から、さらに資源の集中、労働力の支配ひいては行政組織の発達程度などの側面で、両者間の差異を窺うことができよう。

龍山時代の城跡の形状はほぼ長方形を呈し、比較的規則的であるのは版築技術に関係があると思われる。それに、黄河及び長江流域における城跡は一般に岸辺の微高地に立地しており、平坦地の地形を比較的自由に加工することが可能であり、方形区画を設定できたものと言える。弥生時代の囲郭集落は楕円形や卵形を呈するものが圧倒的多数を占めているのは、丘陵地の地形を効果的に活用し、地形の主軸に合わせて長軸を設定するのが最も合理的であるからである。⁽²⁵⁾

龍山時代における城跡内の配置構造はまだはっきりしていないが、目下いささかの手がかりが現れているため、一定の区画が存在したことが分かる。吉野ヶ里遺跡の囲郭集落では、濠で区画された中枢区、居住区、葬祭区、倉庫群などの配置構造上の機能区分が既に明らかになっている。一方、龍山時代の城跡はその後の中国の城郭都市と、弥生時代の囲郭集落はその後の都市構成とそれぞれ比べると、農耕村落との機能区分及びその内部の各機能区の明確的区画があったとは言えないのである。これはまさに都市草創期においてあるべき歴史的特徴と考えられる。

おわりに

従来あまり取り上げられなかった比較文明史の視点から、日本の早期都市について考察を加えてみた。本稿はあくまでも問題提起を目的とするものであって、学界に受け入れられるかどうかは定かではないが、都市文明論に一石を投じることが出来

れば幸いかと思う。この問題に関する研究の余地はまだまだ残されており、今後の研究成果に期待したい。

本稿は、国際交流基金のフェローシップによって駒沢大学研究員として在日研修期間に完成した論文の一部である。作成にあたっては、指導教官駒沢大学教授飯島武次先生、大学院生田島禎章氏より、御指導及び御助言を賜り、心から感謝の意を表したいと思う。

註

- (1) Childe, V. G. 1951: *Man Makes Himself*, The New American Literature, INC.
- (2) 伊東俊太郎 一九八八、『文明の誕生』(講談社)。
- (3) 井上宗和 一九九〇、『日本の城の基礎知識』(雄山閣)。
- (4) Lample, P. 1968: *Cities and Planning in the Ancient near East*, New York.
- (5) 狩野千秋 一九九〇、『中南米の古代都市文明』(同成社)。
- (6) 西川幸治 一九七四、『日本都市史研究』(日本放送出版協会)。
- (7) kemp, B. J. 1991: *Ancient Egypt—Anatomy of a Civilization*, London.
- (8) 註(5)に同じ。
- (9) 伊東俊太郎 一九八五、『比較文明』(東京大学出版会)。
- (10) 都出比呂志 一九八九、『日本農耕社会の成立過程』(岩波書店)。
- (11) 小野忠熙編 一九七九、『高地性集落の研究—資料編』(学生社)。
- (12) 愛知考古学談話会編 一九八八、『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題』。
- (13) 佐賀県教育委員会 一九九四、『吉野ヶ里・本文編』(吉川弘文館)。
- (14) 酒井龍一 一九八四、『弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム』(『文化財学報』第三集、奈良大学)。
- (15) 石野博信編 一九九〇、『古墳時代の研究』第二巻・集落と豪族居館(雄山閣)。
- (16) 白石太一郎編 一九九一、『古墳時代の研究』第五巻・生産と流通Ⅱ(雄山閣)。

- (17) 都出比呂志 一九九一、「日本古代の国家形成論序説——前方後円墳体制の提唱」(『日本史研究』三四三号)。
- (18) 北村優季 一九九二、「日本の古代都市」(『事典・イスラームの都市性』、亜紀書房)。
- (19) 王 巍 一九九三、「中国からみた耶馬台国と倭政権」(雄山閣)。
- (20) 水野正好 一九九〇、「日本文明史」第二巻・島国の原像(角川書店)。
- (21) 註(10)に同じ。
- (22) 寺沢 薫 一九八四、「纏向遺跡とヤマト政権」(『橿原考古学研究所論集』六)。
- (23) 武内雅人・土井孝之 一九八三、「和歌山市善明寺所在鳴滝遺跡発掘調査概報」(和歌山県教育委員会)。
- 植木 久 一九八九、「大阪市中央区法円坂地区で発見された建築遺構」(『ヒストリア』一二四号)。
- (24) 石黒立人 一九九〇、「濠のある集落とない集落」(『季刊考古学』第三二号、雄山閣)。
- (25) 註(10)に同じ。